CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

四條畷学園大学　リハビリテーション学部紀要　第２号　2006

随　想

多言語のこと

坂　口　守　彦
四條畷学園大学
リハビリテーション学部

現在、世界ではおよそ4000種の言語が使われているといわれている。わが国へは世界各国からビジネス、観光などのために多くの人がやってくる。こうした人たちは日本語を使うことなく、英語でことをすませる場合が多い。また、国際的な学会やシンポジウムに出席をするため国外へ出かけたときに、使うのはほとんど英語である。また現在ではインターネットを通じて外国人と会話を楽しむにも英語が使われることが多い。多くの言語のなかで共通語としての地位をここにいたるまで築きあげた英語の実力を否定することはできない。そのためか知識人といわれるひとのなかにも、わが国は将来日々の生活に日本語を使わないようにして英語のみに限定しようと発言する人がいる。そうすることにより今後日本は世界へ雄飛するようになるのだそうだ。

1972年から73年にかけてカナダ環境省に所属する研究所に留学したことがある。留学先では、英語の聞きとりに悩まされた。初めのころは、毎朝、出勤のときアパートのエレベーターを待つ間でさえも、住人に話しかけられるのが苦痛だった。それで、英語の会話力を強化するため市内にある英会話の夜間学校（無料）に通うことにした。ここには移民でサラリーマン、商店の経営者、留学生など、さまざまの国籍をもつ人が在籍していたが、この学校は難易度によってA～Dのクラスにわけられていた。私の会話力とくに聞きとりの力のなさから考えて一番平易なDクラスを選んだ。第１回目の講義が始まる前に説明会が開かれるというので、出席したところこのDクラスでさえ、学生はみな流暢な会話を交わしているではないか。これに驚いてDクラスよりも難易度の低いクラスに移してほしいと申し出たが、これ以下のはないと断られた。しばらく我慢して出席していたところ、やがて中間試験があるという。席について配られた問題を見て驚いた。そのほとんどが文法に関する問題で、内容はわが国の中学の高学年から高校の低学年の生徒に出題される程度のものであった。DクラスをAに変えても、この試験問題は文法の程度が高くなるだけで、会話のテストはまったく実施しないといわれた。世界中からやってくる移民のなかには会話はできても、しっかりとした英文法を身につけているものはすくないのだそうである。英文法の力が弱いと日常の会話には支障がなくても、ビジネスや公務などの領域で、やや込み入ったやり取りが始まるとたちまち困るのだそうである。

それでもあきらめきれず、日本にあるような会話だけを教えてくれるところはないものか、と市内をずいぶん探したが見あたらなかった。周囲がみな英語を話しているのだから、そこにとけ込んで話していれば会話力は自然に上達するもので、ことさら習いにいくまでのことはないのだそうである。そうこうしてほぼ半年も習っているうちに、会話力はさして上達したともおもわれなかったが、朝のエレベーター前で話しかけられて困るということはなくなった。流暢に話そうという力んだ気持ちがなくなったからである。自宅へ帰ると、毎日テレビのニュースやトークショウの番組を食いいるように視た。その際に無理に内容を理解しようとせず、オウム返しのように、アナウンサーやトークショウの司会者の口まねだけをすることにした。所属していた研究室の人で、発音がきれいだと定評のあるトルコからの移民のひとがこの方法がよいと教えてくれたからである。１年ばかりしたころには、会話力があまり向上したとはおもわなかったが、英語のフィーリングのようなものが理解できるようになった。同時に困ったことに日本語の単語がなかなか口をついて出てこなくなることに気がついた。

夜間学校ではラテン系のひとは巻き舌の、インド出身

のひとはインド人特有の、中国系のひとは、あの中国語のアクセントで英語を話す。このように各国から来た人が、それぞれお国の訛りをふんだんにとりいれた英語を話すから、日本人である私には大変わかりにくかった。けれど、上記の学校の先生（中年の女性でボランティアだという）は、どのようなひどい訛りの英語でも、それが英語であれば理解できるらしく即座に回答やコメントを返してきた。日本人の英語も、ネイティブスピーカーにとっては癖のきつい、わかりにくいものとおもわれるが、彼女は正確に回答してきた。これは恐るべき能力だと感じいったものである。慣れさえすれば、どのようなアクセントであっても相手が人間である限り、相互に理解しあえるという信念を持っているという。そして、このように移民の人達に教えるのは無上の楽しみだといっていた。おそらく彼女は、多様なアクセントの裏にこめられた思想の多様性のようなものを楽しんでいたのではないかと、後になってから考えた。

こうして英語ただ１ヶ国語だけにさんざん苦労したが、移民の中には４ヶ国語も５ヶ国も苦もなく操る人を多く見かけた。そこで「どうしてそんなに多くの言語を話せるのか秘訣は？」と訊くと、「そんなものはなにもない。父がフランス人で母がスペイン人で、幼少時代にドイツに住み、青年になってから英語圏に住むようになっただけのこと、知らずしらずのうちにマスターした」という。たしかにヨーロッパに行けば、このくらいの多言語スピーカーはいくらでも見かける。これは、それぞれの言語が類似の言語系統に所属するためだといわれるが、それにしても、ただ１カ国語でもままならぬ日本人にとって羨望以外なにものでもない。なかでも圧巻は、スイスのアルプスへでかけたとき、観光案内所のデスクにすわる女性で、世界中からアルプス登山やスイス観光にきた人たちが次々といろいろな言語で質問してくる。こうした観光客を相手に10種類を越す言語で、ときに笑ったりしながら立て板に水のごとくしゃべる。まったくおそるべき能力である。

科学の世界で、うらやましいと思ったのは２年ばかり前に京都で出会ったカナダの科学者である。彼は生物資源学の領域では世界的に名のとおった研究者であるが、英語以外にフランス語、スペイン語、ドイツ語ができる。話すだけではなく書くことも自在にできるので、各国から講演や講義を依頼されると、出かけていっては当該国語で話し、スライドも作り、プリントも配るという。このように多言語を自在に操る能力は、上の例に示したように「知らず知らずのうちにマスターしただけ」というのでは無理で、とくに書く力をつけるためには人知れず努力を積んだものであろう。彼はいう。多言語をマスターできると、一口には言い表せない喜びがあると。おそらく多言語をとおして多様な思想を学ぶ喜びがあるのではなかろうか。

共通語としての英語を否定するものではない。東アジアに住むわれわれとしては、少なくとも一衣帯水の地で使われる中国語、韓国語ぐらいは何とかしたいものである。そうすれば、一口には言い表せない喜びが得られるだろうから。